

フィリピンにおける虐待経験のある親の生活実態に関する調査 —虐待防止プログラムの開発に向けて—

西垣 伸悟*・栗原 慎二

(2020年12月7日受理)

A survey on the living conditions of parents who have experienced child abuse in the Philippines
: towards the development of a child abuse prevention program

Shingo Nishigaki and Shinji Kurihara

Child abuse is a widespread and serious problem in the Philippines. The purpose of this study was to determine the reality of the lives of parents who have experienced child abuse, and to develop an abuse prevention program tailored to the reality of the Philippines. Semi-structured interviews were conducted with parents who have experienced child abuse and their supporters to collect data and conduct a thematic analysis. The results showed that many parents in the Philippines were found to be in a situation similar to the Family Stress Model. In addition, it was speculated that parents were more likely to have lived in an environment where they were at high risk for inappropriate parenting during their childhoods.

Key words : child abuse, program, Philippines

問題と目的

黒崎・田中・江原・清水(2013)は被虐待児に、境界域知能, 多動, 衝動性, 言語, 社会性の遅れ, 認知機能の偏りなどの症状が見られたと報告している。児童虐待は, 特に開発途上国での蔓延率が高く(Hillis, Mercy, Amobi, & Kress, 2016)深刻な問題となっている。

開発途上国であるフィリピンでは, Sanapo & Nakamura (2011)が, 公立学校の6年生270人を対象にアンケート調査を行い, 約60%の児童が自宅で暴力行為を伴う否定的な育児を経験していることを明らかにしている。

フィリピン国内に蔓延する児童虐待に対して, 国は子どもの保護に関する法律や政策を整備し, 数多くの児童虐待防止プログラムを立ちあげている。しかし, 予算の割り当ては十分ではなく, 法律や政策で求められていることを様々なプログラムの中で十分に実施できているとは言えない状況である(Madrid, Ramiro, Hernandez, Go & Badilio, 2013)。さらに, 実施されているプログラムについての実証的な調査や評価が限られて

いる点も問題として指摘されており(Steven, R, 2017), フィリピンでは児童虐待防止プログラムの実践と検証による効果の裏付けが課題となっている(Steaven, R, 2019)。

こうしたことから, 児童虐待防止に最も有効な手段とされている, 子どもと親との安定した関係を築くためのプログラム(WHO, 2009)をフィリピンで実施する必要性が高いと言える。

さらに, Jack (2012)は, 困難に直面している親に対して, 養育のための実用的な情報を提供するなど, 養育だけの支援をするのは, 養育態度の改善にあまり大きな効果を生まないと指摘しており, 親子の関わりを改善するためには, 親が直面するリスクに対応することが重要であると述べている。フィリピンでは多くの家族が貧困, 不衛生な環境, 過度な過密, 治安の悪さといった様々な困難に直面しながら日々生きている(UNICEF, 2006)。そうしたフィリピンの困難な現状を考えると, 親に対して, 子どもとの関わり方だけをトレーニングするような内容のプログラムは十分ではないだろう。さらに, 犬塚(2016)は虐待問題

* 広島大学大学院教育学研究科博士課程前期

を抱える家族への支援では、支援者による支援によって、家族が無力化されていくということがおこりやすいため、家族の力を強化する工夫が必要であると述べている。このことから、支援者が親の代わりに親が直面する困難を解決するのではなく、親自身が直面する困難に自ら対処できるように支援することも重要であると考えられるだろう。

ところで、開発途上国でプログラムを実施するときの注意点として、Mejia, Calam&Sanders (2012) は、先進国で実施されているプログラムをそのまま持ち込むのは文化的に困難であるため、その国のニーズに応じてプログラムを開発する必要があると述べている。

そこで、本研究では、子どもと親との関係を安定化させ、なおかつ、親自身が直面する困難に自ら対処できるようエンパワメントする児童虐待防止プログラムを、フィリピンのニーズを踏まえて開発するために、虐待経験のある親の生活の実態をインタビュー調査により明らかにする。

対象者

対象は2019年10月時点でマニラ近郊にある児童養護施設で働くソーシャルワーカー（以下、SW）3名と、その施設に子どもを保護されている親3名とした。本施設では親からの身体的虐待や心理的虐待、ネグレクトなどを受けている子どもを保護している。

対象者を選定する基準は、SWについては①親に対する支援を日常的に行っている、②親支援の経験が3年以上あるとした。親の選定基準は①施設に子どもが保護されている親、②子どもへの虐待経験のある親、とした。そして、両方の基準を満たす者を対象とした。

対象者には、個人名など個人を特定できる情報は使用しないこと、研究終了後データは破棄することが可能なことを書面にて確認し同意を得た。また、得られた録音データは研究者以外が再生できないよう管理した。

データ収集

2019年10月に、半構造化面接によってデータ収集した。SWに対しては性別、親への訪問支援の経験の有無、施設での勤務年数を基本情報として事前に聴取した。面接は、SWに対しては施設内の個室で、親に対しては地域の公共施設内の個室で行った。面接者は第一著者であり、通訳者は

日本の大学院を修了し、フィリピンで児童養護の仕事に携わっているフィリピン人が行った。ICレコーダーで録音し、メモをとりながら実施した。

データ分析

得られたデータについては Braun & Clarke (2006) の主題分析を参考に次の手順で分析を行った。①ICレコーダーに記録されたインタビュー内容の日本語の部分の文字起こし、逐語録を作成する、②文字データに対し、文脈の意味や内容を反映したコードを割り当てる、③意味内容の近似したコードを組み合わせて包括的なサブテーマを形成する、④意味内容の近似したサブテーマを組ませてさらに包括的なテーマを作成する。

さらに、著者が行った分析を心理学を専攻する博士課程の学生1名が、コードやサブテーマ、テーマについて、下位のレベルの意味や内容を反映できているか確認し、反映できていないと判断したものについては協議を行った。そして、いくつかの項目については変更を行った上で最終決定をした。

結果

(1) SWの基本情報

インタビュー対象のSWは男性1名、女性2名であった。全員が親への支援を行っており、現在の施設での勤務年数はそれぞれ、11年、8年、4年であった。

(2) SWが語る親の生活の実態

7テーマ、21サブテーマ、50コードにより構成された (Table 1.)。分析の結果は次のようにまとめられた。なお、テーマ【】、サブテーマ《》、コード〈〉で示す。

フィリピンの親は、〈シングルマザー〉〈刑務所にいる親〉〈病気の親〉〈ネグレクトする親〉など、必ずしも一様ではなく【多様な状態】であった。多くの親に共通していたことは〈お金がなくて子どもの要求に応えられない〉といった《子どものケアへの負の影響》や、他にも《子どもの教育への負の影響》《夫婦関係への負の影響》《家庭設備への負の影響》《親の精神面への負の影響》など、【貧困からの負の影響】を受けているということだった。

そのような厳しい環境での生活の中、多くの親は【子どもへの愛情】をもっているが、【親子関係】は《子どもに対する暴力》を行ったり、〈親子で出かけない〉〈親子で遊ぶことはほとんどない〉とい

フィリピンにおける虐待経験のある親の生活実態に関する調査

Table 1. SW が語る親の生活の実態

テーマ	サブテーマ	コード
多様な親の状態		シングルマザー 刑務所にいる親 病気の親 ネグレクトする親 DVする親 ギャンブルに依存する親 精神的に不安定な親 (70%) アルコールの問題を抱える親 (60%) 定職が無い親 (40%) 麻薬を使用する親 (20%) (20%~30%) 親がいない子ども (2人/24人中)
貧困の負の影響	子どものケアへの負の影響	お金がなくて子どもの要求に応えられない お金がなくて子どもへのケアが不足
	子どもの教育への負の影響	収入が不安定で子どもに教育を受けさせられない
	夫婦関係への負の影響	夫婦関係が悪化
	家庭設備への負の影響 親の精神面へ負の影響	家庭の設備が整っていない 生活のお金が足りないことが不安 子どもへ十分な食料を与えられるかが不安
子どもへの愛情		この施設のごどもは愛情を感じている (多くの子) 子を愛している (90%) (80%) 子を大切にしている (80%) 子どもには教育を受けさせたい (70%)
親子関係	子どもに対する暴力	親から暴力を受ける子ども (80%以上) 兄弟から暴力を受ける子ども (ほとんど全員)
	限られた情緒的交流の機会	親子では出かけない 子どもと遊ぶことはほとんどない モールに行く (年3, 4回)
ソーシャルサポートから孤立	支援制度にアクセスできない	支援の利用の仕方がわからない 専門機関についての情報を知らない (50%) 支援を申請するお金がない 行政が正常に機能していない
	家庭の問題は家庭内で解決しようとする風潮	相談することを躊躇する 家族以外には相談しない (多くの家族)
施設の親への支援	子どもの様子を報告	定期的に子どもの状態を報告
	家庭訪問	家庭訪問
	宗教の教えをもとにした教育	家庭の問題解決を支援 宗教の教えに則った教育
	子どもをサポート	子どもを支援することで親をサポートする
	家庭で過ごす機会をつくる 施設での親子交流イベント	子どもの一時帰宅 (許可が出た子のみ) 親を招いて施設でクリスマスパーティ
必要な支援	自己統制	感情のコントロール
	親子の愛着形成	親子の愛着形成 親自身の愛着形成
	家族の良好な関係づくり	子どもの話を聞く練習 子どもとの接し方の練習 夫婦の良好な関係づくり 親戚との良好な関係づくり
	財政管理	マネーマネジメント (仕事がない人もあるので考慮しないといけない)
	自己抑制	アルコール・ドラッグ依存防止トレーニング
	職業訓練	職業訓練

った《限られた情緒的交流の機会》しかなかったりする状況であった。

そして、《支援制度にアクセスできない》《家庭の問題は家庭内で解決しようとする風潮》があるなど【ソーシャルサポートから孤立】した状態の中で子育てをしていることも明らかになった。

虐待経験のある親に対する支援を行っている【施設の親への支援】の内容は《子どもの様子を

報告》《家庭訪問》《宗教の教えをもとにした教育》《子どもをサポート》などであり、子どもと親との関係を安定化させたり、親自身が直面する困難に自ら対処できるようエンパワメントしたりする支援は行われていなかった。

また、親に対してさらに【必要な支援】としては、《自己統制》《親子の愛着形成》《家族の良好な関係づくり》《財政管理》《自己抑制》《職業訓練》

Table 2. 親自身が語る自身の状態

テーマ	サブテーマ	コード
子育ての葛藤	子育ての精神的負担	シングルマザーゆえの疲れ 多くの子どもを育てる大変さ 毎日子育ての疲労を感じる 子育てをあきらめてはいけない
	親としての葛藤	施設に子どもを預けていることへの後ろめたさ 子どもを迎え入れることができるか心配
	気分の落ち込み	気分の落ち込み
	子育ての喜び	子どもと話をするのが楽しい 子どもの存在が喜び 子どもが喜んでいと嬉しい 子どもが生きる希望 家族と過ごすことが嬉しい
子どもとの情緒的交流		料理を作るときに子どもと話す 食事のときに子どもと話す 子どもと時々パーティをする 子どもと時々モールに行く
子どもの考えについての理解の差	子どもの考えを理解しようとする態度	子どもの考えについて考える
	子どもの考えを理解する難しさ	子どもの思いがわからない 子どもの行動の理由がわからない
	子どもの考えを理解できる	子どもの考えを理解できる
ソーシャルサポートのニーズの高さ	孤立した子育て	子育ての参考になる人がいない 家族のことは相談しない 自分で解決しようとする 親子研修に参加する人は少ない
	子育ての相談	子育ての知識を持つ人へ相談する
	ソーシャルサポートのありがたさ	子育て支援がありがたい
怒りの反応の差	衝動的な行動	子どもの考えがわからないと手をだしてしまう イライラして子どもに物を投げる 怒りを抑える方法がある
貧困の負の影響	貧困が生活苦の一番の原因 貧困の生活への負の影響	お金がないことが一番の困る 不自由な学生生活 教育のお金がない 子どもに満足なご飯を与えられない 医療費が足りない
	自身の親の代から貧困	自分の親の代から貧困 食べ物がなかったことが悲しかった（親が子どもの頃） 貧困が悲しかった（親が子どもの頃）

などがあげられた。

(3) 親自身が語る自身の状態

6 テーマ、15 サブテーマ、37 コードにより構成された。(Table 2.)。分析の結果は次のようにまとめられた。

親は〈子どもに満足なご飯を与えられない〉〈医療費が足りない〉などの《貧困の生活への負の影響》を受けながら生活しており、《貧困が生活苦の一番の原因》と捉えていた。また、親は自分の《親の代から貧困》であり、《貧困の負の影響》を長期間にわたり受け続けていた。

親は〈多くの子どもを育てる大変さ〉や〈シングルマザーゆえの疲れ〉、〈毎日子育ての疲労を感じる〉といった《子育ての精神的負担》を感じながら生活している。また、〈施設に子どもを預けていることへの後ろめたさ〉を感じつつも、預けている〈子どもを迎え入れることが心配〉という思

いを持っており《親としての葛藤》を抱きながら子どもを施設に預けているようであった。このように子どもの存在が精神的な負担になり、《気分の落ち込み》を感じることもある一方で、〈子どもと話をするのが楽しい〉〈子どもの存在が喜び〉などのような《子育ての喜び》も感じており、【子育ての葛藤】を抱えながら生活していた。

そのような生活の中、《食事の時に子どもと話す》、《子どもと時々パーティをする》、《子どもと時々モールに行く》などして【子どもとの情緒的交流】をもっているようだった。

また、親は《子どもの考えを理解しようとする態度》をもっており、子どもの考えについて考えるが《子どもの考えを理解する難しさ》を感じる親と、《子どもの考えを理解できる》と感じている親とに分かれており、【子どもの考えについての理解の差】があるようだった。

さらに、〈子どもの考えがわからないと手をだしてしまう〉〈イライラして子どもに物を投げる〉など《衝動的な行動》をとる親と《怒りに対処できる》親とがあり、【怒りの反応の差】もあるようだった。

多くの親は〈子育ての参考になる人がいない〉、〈家族のことは相談しない〉などソーシャルサポートを得ず、《孤立した子育て》を行っているようであった。一方、《子育ての相談》の経験がある親は《ソーシャルサポートのありがたさ》を実感していたことから、親の【ソーシャルサポートのニーズの高さ】が明らかとなった。

考察

親によれば《貧困が生活苦の一番の原因》であるとのことであった。親を苦しめる貧困が児童虐待へと至るまでの構造に関して、Conger et al. (2000) は貧困による社会経済的ストレスが親の心理的苦痛を増すことにより、親の養育行動に影響を及ぼすこととする家族ストレスモデル (Family Stress Model: FSM) を考案している (Figure 1.)。このモデルによると、貧困や経済的にマイナスの出来事 (例：農場や事業の喪失) などの経済的困難は、家庭内の経済的プレッシャーに直接影響を与える。経済的プレッシャーとは、十分な食料や医療などの基本的な生活に必要なものを購入・利用することができないなどのストレスフルな状況を意味し、親の心理的健康や親同士の関係性に負の影響を与える。そして、親の心理的苦痛や親同士の対立や回避へとつながり、こうした親の問題が育児の質を低下させ、子どもに悪影響を与えるとされている。そして、このモデルは多くの研究によって、様々な文化的背景や家族構造においても成り立つことが示されている (Conger, 2010)。

親は貧困により〈子どもに満足なご飯を与えられない〉〈医療費が足りない〉などの様々な不自由な経験を強いられていた。また、SWによれば親はお金がないことで〈家庭の設備が整っていない〉、

〈子どもの要求に応えられない〉、〈生活のお金が足りないことが不安〉などの【貧困の負の影響】を受けながら生活しているとのことであった。これらは親にとってはストレスフルな状況であり FSM に当てはめると「経済的プレッシャー」にあたる部分だと考えられる。

また、SWによればお金がないことで〈夫婦関係が悪化〉し、〈DVする親〉がいたり、夫婦間で折り合いをつけることができず〈シングルマザー〉になったりするとのことであった。これは FSM の「夫婦間の対立・回避」にあたるだろう。

また、家庭内で DV や親同士の対立・回避を子どもが目撃することは心理的な虐待となりうる。このことから、「夫婦間の対立・回避」が「不適切な養育」に繋がっている可能性が示唆された。

そして、親は〈子どもが喜んでいて嬉しい〉〈子どもと話をするのが楽しい〉というように《子育ての喜び》を感じる一方、〈シングルマザーゆえの疲れ〉や〈多くの子どもを育てる大変さ〉といった《子育ての精神的負担》を抱え、《気分の落ち込み》を感じていた。SWによれば〈精神的に不健康な親 (70%)〉であり、施設で関っている親の約 7 割は精神的に不健康な状態であるという。このことから、FSM で示されている「親の心理的苦痛」を感じている親が多数いる可能性が示された。

ところで、精神的に不健康な状態であるほど他者の感情を正確に理解できなくなる (中村他, 2016) ことが知られている。つまり精神的に不健康な親は子どもの考えを理解することが困難な状態になっている可能性がある。そのような状態では、適切な養育を行うことが困難となる。親の中には〈子どもの考えを理解する難しさ〉を感じている親がおり、「親の心理的苦痛」が「不適切な養育」に繋がっている可能性が示唆された。他にも、〈子どもの考えがわからないと手をだしてしまふ〉〈イライラして子どもに物を投げる〉などの《衝動的な行動》をとってしまうというように、精神的な苦痛が身体的虐待といった「不適切な養育」を生み出していると考えられる。こうした実態は、「親の心理的苦痛」が「不適切な養育」へと繋がることを示す FSM と一致しているといえるだろう。

以上より、フィリピンでは貧困が FSM に近い状況を生み出している可能性が示唆された。フィリピンでは 1 日当たりの収入が 3.2 ドル以下の貧困状態にある国民の割合が 20.8% (World Bank,

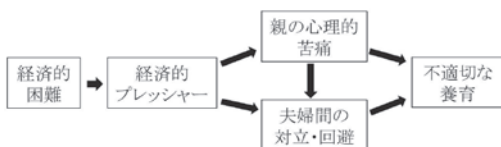


Figure 1. 家族ストレスモデル (FSM)

※Conger et al. (2000) を参考に筆者が作成

2019) であることから、多くの親が今回の調査で明らかになったような FSM に類似する状況にあると考えられるだろう。

また、親は《自身の親の代から貧困》であり、親自身も自らの親から「不適切な養育」を受けてきた可能性が高い。子ども時代に虐待を受けたとき、親になって子どもに虐待を行うリスクが高いという、世代を超えた虐待の連鎖の問題が知られている (Oliver, 1993)。その原因として、親自身の子ども時代の養育経験に基づいて、親の内的ワーキングモデルが不安定となり、子どもとの情動調律や応答的関りが不全となることが考えられている (久保田, 2010)。このことから、フィリピンの虐待経験のある親は、自身の子ども時代の影響で内的ワーキングモデルが不安定となり「不適切な養育」に至るリスクが高まっていると考えられる。

フィリピンのニーズに沿った児童虐待防止プログラムの開発を行うためには、このような親の実態を考慮したうえで開発を進めていくことが必要であると考えられる。

総合考察

フィリピンでは蔓延する児童虐待を防止するためのプログラムの開発が求められている中、本研究では、虐待経験のある親自身やその支援者にインタビューを行い、虐待経験のある親の生活の実態を明らかにすることで、フィリピンのニーズを踏まえてプログラムを開発するために重要な結果を得ることができた。

しかし、本研究には、対象者の偏りという課題がある。今回、調査は特定の養護施設の SW とその養護施設に関わる親を対象として実施されたことから、質的な偏りがあった可能性は否めない。今後プログラムを開発し、実践する中で、様々な参加者や支援者の声を取り入れ、プログラムの内容を修正していくなどして、よりフィリピンにおいて汎用性の高いプログラムへと改良し続けていく必要がある。

今後の課題としては、プログラムの開発があげられる。本研究で明らかになった親の実態から考えられる開発のポイントをいかに列挙する。

①経済的プレッシャーによるストレスに親が対処できるようなスキルを育む。

Wadsworth et al. (2011) は、FSM をもとに、経済的プレッシャーが生み出すストレスに親がうまく対処・適応することができれば、連鎖的に引

き起きる様々な問題を防ぐことに繋がる可能性がある」と指摘している。フィリピンの多くの親は FSM に類似する状況にあると考えられることから、親自身が自らの直面する困難に対処できるようエンパワメントするプログラムを開発するためには、経済的プレッシャーによるストレスに親が対処できるようなスキルを育むことが、ニーズとして存在すると考えられる。

②短期間の行動レベルに焦点を当てて介入する。

フィリピンの多くの親は、自身の子ども時代の影響で内的ワーキングモデルが不安定であると考えられる。内的ワーキングモデルが不安定な親の養育に対する介入は大きく 2 つに分けられる。短期的で行動レベルに働きかける方法と長期的で親の内的表象に働きかける方法である。van IJzendoorn, Juffer & Duyvesteyn (1995) は、短期間の行動レベルに焦点をあてた介入の方が、内的表象に焦点をあてた長期的介入よりも大きな効果が見られたことを報告している。このことから、フィリピンでは、子どもと親との安定した関係を築くためのプログラムを開発するためには、親への短期間の行動レベルに焦点を当てて介入することが、ニーズとして存在すると考えられる。

③子どもとの関わり方を親に伝え実践する内容を組み込む。

フィリピンの多くの親は子どもとの情緒的な交流の機会が限られている。さらに、そうした交流の方法を学べるような専門家や親同士の繋がりほとんどなく、子どもとの関わりで悩む親もいた。このことから、プログラムの中では子どもとの関わり方をモデリングで示し、親が実践するというように、親に対し、子どもとの関わり方を具体的に伝える工夫が必要だろう。

④他者と協力して問題を解決するなどの問題解決スキルを育む内容を組み込む。

フィリピンの多くの親は、家庭の問題は家庭内で解決しようとしていた。日頃から、子育てに関する悩みを他者に相談し、少しでも負担を軽減できるようになるためにも、プログラムの中で他者と協力して問題解決をする練習を組み込むことが有効であるだろう。

こうした点を踏まえて、今後プログラム開発を進めていく必要がある。

付記

本論文は令和 2 年度に広島大学大学院教育学研究科に提出された修士論文の一部を抜粋し、加筆、

修正したものである。

引用文献

- Braun, V., & Clarke, V. (2006). Using thematic analysis in psychology. *Qualitative research in psychology*, 3(2), 77-101.
- Conger, K. J., Rueter, M. A., & Conger, R. D. (2000). The role of economic pressure in the lives of parents and their adolescents: the family stress model.
- Conger, R. D., Conger, K. J., & Martin, M. J. (2010). Socioeconomic status, family processes, and individual development. *Journal of Marriage and Family*, 72(3), 685-704.
- Hillis, S., Mercy, J., Amobi, A., & Kress, H. (2016). Global prevalence of past-year violence against children: a systematic review and minimum estimates. *Pediatrics*, 137(3).
- 犬塚峰子 (2016). 子ども虐待における家族支援. *児童青年精神医学とその近接領域*, 57(5), 769-782.
- Jack P. Shonkoff (2012), Leveraging the biology of adversity to address the roots of disparities in health and development. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States*, 109(Supplement 2).
- 久保田まり (2010). 児童虐待における世代間連鎖の問題と援助的介入の方略: 発達臨床心理学的視点から. *季刊・社会保障研究*, 45(4), 373-384.
- 黒崎碧・田中恭子・江原佳奈・清水俊明 (2013). 被虐待児における認知, 行動, 情緒機能の特徴についての検討. *順天堂醫事雑誌*, 59(6), 490-495
- Mejia A, Calam R, Sanders MR.(2012) A review of parenting programs in developing countries: opportunities and challenges for preventing emotional and behavioral difficulties in children. *Clin Child Fam Psychol Rev*,15(2),163-175.
- 中村杏奈・浦野由平・シュレンベル レナ・大井葉月・李智慧・下山晴彦 (2016). うつ状態における他者の表情認知についての研究動向と今後の展望. *東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要*, 39, 17-24.
- Oliver, J. E. (1993). Intergenerational transmission of child abuse: Rates, research, and clinical implications. *The American journal of psychiatry*.
- Sanapo, M. S., & Nakamura, Y. (2011). Gender and physical punishment: The Filipino children's experience. *Child Abuse Review*, 20(1), 39-56.
- Stations, S. W. (2018). Third Quarter 2017 Social Weather Survey. <https://www.sws.org.ph/swsmain/artclidisppage/?artcsyscode=ART-20171128154728>
- Steven Roche (2017). Child protection and maltreatment in the Philippines: A systematic review of the literature, *Asia and the Pacific Policy Studies*,4-1,104-128.
- Steven Roche (2019), *Childhoods in Policy: A Critical Analysis of National Child Protection Policy in the Philippines*, *Children & Society*,33-2,P.95-110.
- UNICEF. (2006). *Making Philippine Cities Child-Friendly: Voices of Children in Poor Communities*. Innocent Research Centre, Florence.
- van IJzendoorn, M. H., Juffer, F., & Duyvesteyn, M. G. (1995). Breaking the intergenerational cycle of insecure attachment: A review of the effects of attachment - based interventions on maternal sensitivity and infant security. *Journal of child Psychology and Psychiatry*, 36(2), 225-248.
- Wadsworth, M. E., Santiago, C. D., Einhorn, L., Etter, E. M., Rienks, S., & Markman, H. (2011). Preliminary efficacy of an intervention to reduce psychosocial stress and improve coping in low-income families. *American Journal of Community Psychology*, 48(3-4), 257-271.
- World Bank (2019). *Philippines Economic Update, October 2019 Edition: Resuming Public Investment, Fast Tracking Implementation*.